

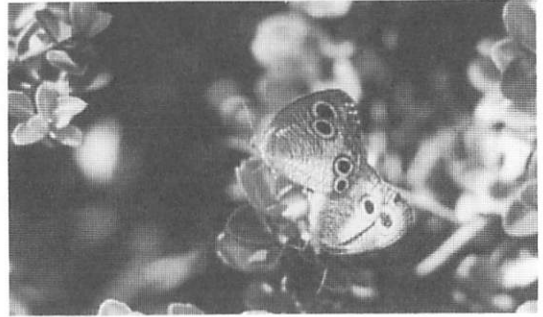
葉上に止まるウラナミジャノメ

ない。明るい草原にはウラナミジャノメ、暗いジメジメした陰性環境にヒメウラナミジャノメが生息している。両者の生息エリアの最短距離は50mもないところがある。当地のウラナミジャノメは第1化の発生しかみないようである。

おわりに

当エリアでヒメヒカゲの観察を行って昨年は2シ

ーズン目であった。あくまで成虫だけの観察であったが、観察地に通う回数が増えれば増えるほど新たな場面に出会うことが出来た。しかしながらその半面、新たな疑問も起こってきた。特に成虫以外の通年生態についておりをみて調査・観察したいと考えている。



交尾するウラナミジャノメ

(TATEIWA YUKIO 加古川市加古川町西河原97-7
サンロイヤル加古川リバーージュII 713)

雌岡山のギフチョウ

山口 福男

神戸市西区の雌岡山(メッコサン)の山頂にギフチョウが飛来することは神戸の蝶マニアの間では周知のことであるが、その数は多いと言えるものではない。私の経験では絶好の条件の日を選んで訪ねても必ず出会えるとは限らず、1頭でも見ることのできる確率は50%以下であった。この山のギフチョウのことを私が知ったのは1955年で吉坂道夫さんからの情報によるものであった。翌年(1956)教えられたとおりソメイヨシノの満開になるのを待って穏やかな晴天の日を選んで登山した。そして念願のギフチョウにはじめて出会うことができた。それからは取り付かれたように1991年まで、この山の頂上に祭られた神出神社詣でが続くことになった。途中4回の欠則があるものの32年分の記録が得られたのでここに報告する。

調査方法

4月上旬から中旬の間の1日を選び、午前11時か

ら12時までの間に山頂の境内に飛来する成虫を数えた。上記の方法ははじめからこのように計画したのではなく、何年か調査を続けているうちに自然に同じ方法に固定していたのであった。ギフチョウが山頂に飛来する日はソメイヨシノの開花と同調していて、いるとすれば開花期間中の穏やかな晴天日ならば間違いなく会うことができた。飛来が多いと1日だけの観察で満足できたので重ねて調査をしなかったが、少なかったり1頭も見ることができなかった年には始めの頃は何日か調査していたが結果は同じであったので、いつしか年に1回となった。観察の時刻と時間は、ギフチョウのことをあまり知らなかった頃は長時間粘っていたが、そのうち飛来し始めるのは午前11時前後で12時を過ぎると姿を見せなくなるのがわかってからは昼前の1時間だけ観察することにした。飛来数は多いときでも数分おきに1頭程度で、しかも通過するだけの個体が殆どであったので、1時間の間に見ることのできた数を集計

表1 1956年から1991年までの雌岡山におけるギフ
チョウ観察記録一覧表

	西暦	月 日	♂	♀	計
1	1956	4月12日	3	1	4
2	1957	4月14日	18	0	18
3	1958	4月16日	9	1	10
4	1959	4月 -	0	0	0
5	1960	4月 9日	1	0	1
6	1961	4月 -	0	0	0
1962年～1965年まで欠測					
7	1966	4月 -	0	0	0
8	1967	4月 -	0	0	0
9	1968	4月14日	1	0	1
10	1969	4月 -	0	0	0
11	1970	4月 -	0	0	0
12	1971	4月 -	1	0	1
13	1972	4月15日	1	0	1
14	1973	4月18日	1	0	1
15	1974	4月12日	1	0	1
16	1975	4月10日	1	0	1
17	1976	4月 -	0	0	0
18	1977	4月 -	0	0	0
19	1978	4月 -	0	0	0
20	1979	4月10日	3	0	3
21	1980	4月 -	0	0	0
22	1981	4月 3日	16	0	16
23	1982	4月 -	0	0	0
24	1983	4月 5日	6	1	7
25	1984	4月17日	0	0	0
26	1985	4月16日	0	0	0
27	1986	4月21日	0	0	0
28	1987	4月15日	1	0	1
29	1988	4月 -	0	0	0
30	1989	4月 -	0	0	0
31	1990	4月 -	0	0	0
32	1991	4月16日	0	0	0

するだけとした。この場合、同一個体が周回していれば重複カウントする心配があるが、このことについては1957,1958年の経験からその可能性は少ないと判断した。当時は多くの標本を必要としたので、飛来個体を可能な限り捕獲し、完全個体は残して鱗粉のはげたのや傷のあるのは放していたが、同じ破損状態の個体が再捕獲されることはなかった。

調査結果

1956年から1991年の間に調査できた32回のうちギフチョウの姿を見ることができたのは14回で、率にすると44%になる。最も多く飛来したのは1957年で18頭を見ている。この年の前後数年間は毎年飛来を見ているが、1959年は姿を見せず、1960年は1頭だけで1961年は再び観察できなかった。その後4年間欠測し1966年から調査を再開したが、1968年に1頭見ただけで1970年まで0が続いた。1971年から1975年までは飛来するが毎年1頭だけで、1976年から3年間、まともに出会うことができなかった。1979年からは隔年に3,16,7頭の飛来を見たあと、1984年以降調査を終了した1991年までの間は1987年の1頭だけであった。以上をまとめてみると32年のうち飛来を見たのは14回、そのうち1頭だけが8回、2頭以上観察できたのは6回あり、この間に多いと感じたのは1956年から1958年の間と1979年から1983年の間であった。以上の観察結果から雌岡山のギフチョウは普段の年の生息密度はかなり低いままで経過し、密度が上昇しはじめると数年間持続するようであるが、はじめの多発から次の多発まで20年も間隔があった。

私はこの山に飛来するギフチョウが何処で育っているか知らない。山頂付近でないことは断言できる。また、南斜面でもない。このあたりは食草のヒメカンアオイは非常に少なく、とうてい発生源になるとは思えない。ヒメカンアオイはこの山の北麓から押部谷にかけて散在する林の周辺に生育していることから見て、ギフチョウは案外遠いところから山頂めがけて集まってくると考えるのが無難かもしれない。

(YAMAGUCHI FUKUO)

神戸市須磨区神ノ谷3丁目6-4)